

朝倉古墳発掘調査概要報告書Ⅱ

2010年3月

高知大学人文学部考古学研究室

朝倉古墳発掘調査概要報告書Ⅱ

2010年3月

高知大学人文学部考古学研究室

例　言

- 1 本報告は高知市朝倉宇宮の奥小字三月田に所在する朝倉古墳の2009年度発掘調査概要報告である。
- 2 調査は、高知大学人文学部人間文化学科考古学研究室が主体となって実施した。調査は、清家章（人文学部教授）が担当した。
- 3 本調査は、財団法人三菱財團の学術研究助成を得て実施した。
- 4 調査期間は2009年8月17日から9月25日である。
- 5 写真の撮影は清家と渡邊可奈子・岡本治代が主として担当した。
- 6 挿図のうち、図1～3の方位は真北を示し、その他の方位は磁北である。標高は海拔を示す。
- 7 図3は国土地理院発行の5万分の1地形図を利用した。
- 8 石室の左右は、奥壁から入り口を見た時の左右を示す。
- 9 調査には高知大学人文学部考古学ゼミ生ならびに人文学部1～2年生が参加した（学年は当時）。馬場省吾・渡邊可奈子・岡本治代（以上、高知大学大学院生）、岡山克也・嶋圭太・妹尾佳奈・山崎香菜恵・渡邊早苗・石井聰之・瀧宮智春・村上裕紀・森田沙織・岩橋恵・川田怜奈・上月ちあき・永島順太・藤井雄大・野口真未（以上、高知大学学生）。なお、整理作業には上記学生の多くがこれに参加したが、岡本・石井・瀧宮・村上・森田・岩橋・藤井・野口がその中心を担った。
- 10 調査の実施にあたり、出原恵三・松田直則・森田尚宏・安岡保・青木ハウス・朝倉神社・朝倉宮の前奥咲内町内会・株式会社トヨタ部品四国共販高知支店・高知県教育委員会・高知市教育委員会（個人・団体の順。五十音順。）より、多大なご協力をいただいた。
- 11 本書の執筆は、清家・桥家豊（卒業生）・岡本が担当した。分担は文末に示した。
- 12 本書の編集は、清家の助言を得ながら岡本が担当した。

目 次

第Ⅰ章 調査経過.....	1
1 周辺の遺跡.....	1
2 調査の経緯と経過.....	4
第Ⅱ章 調査成果.....	7
1 墳丘の調査成果.....	7
2 石室調査区の成果.....	8
第Ⅲ章 出土遺物.....	17
1 出土遺物の種類.....	17
2 古墳時代の遺物.....	17
第Ⅳ章 まとめ.....	19

図版目次

図版	図版
1 1 古墳の立地	7 1 敷石検出状況（玄室8B区）
2 石室正面	2 敷石検出状況（玄門部）
2 1 墳丘第2トレンチ（北から）	3 玄室右側壁（羨道から）
2 2 墳丘第2トレンチ（南から）	4 玄室左側壁（羨道から）
3 1 前庭部・羨道全景写真	5 玄室右側壁（奥壁から）
2 前庭部（羨門）	6 玄室左側壁（奥壁から）
4 1 玄門（羨道から）	7 羨道右側壁
2 玄門（玄室から）	8 羨道左側壁
5 1 玄室全景	8 1 古墳時代の土器
2 玄室全景（断ち割り後）	2 古墳時代の土器（裏面）
6 1 玄室奥壁	
2 敷石検出状況（玄室9A・10A区）	

挿図目次

図1 朝倉古墳の位置（赤畠賀佳製図）	1
図2 朝倉古墳の立地（桥家製図）	2
図3 周辺の主な古墳（辰見知香製図）	3
図4 石室前庭部掘削前状況	4
図5 遺物出土状況	4
図6 発掘調査風景	5
図7 調査の1コマ	5
図8 調査区配置図（瀧宮製図）	7
図9 墳丘第2トレンチ平面図・土層断面図（村上製図）	8
図10 石室調査区・区割り設定図（野口製図）	8
図11 石室調査区縦断土層図(瀧宮製図)	10
図12 石室調査区横断土層図(石井・瀧宮・村上製図)	11
図13 前庭部平面図・土層図（岡本製図）	12
図14 1A区・E1A南拡張区土層図（森田製図）	12
図15 石室調査区実測図（岡本製図）	13~14
図16 古墳時代の土器（村上製図）	17

第Ⅰ章 調査経過

1 周辺の遺跡

朝倉古墳は、高知市朝倉字宮の奥に所在する。高知市は高知県の中部に位置し、なかでも朝倉は高知市の西部にあたり、いわゆる高知平野全体においても西端に位置する。

朝倉古墳は、高知市西部の北に広がる山々の一つ、赤鬼山の中腹から南向きに派生する尾根の東側斜面上方にある。赤鬼山の南側山腹と古墳のある尾根とでV字状の谷が形作られ、その谷奥からやや南に古墳は位置する。やや小高い場所に立地しているにも関わらず、さして眺望は開けているわけではない。それでも東は鏡川流域の平野部を見渡すことができる。南には中世の朝倉城跡が築かれた城山が間近に迫っており、城山と古墳の存する赤鬼山の間にあり畠内坂を抜ければいの・枝川方面へと抜け仁淀川に至る。つまり、当古墳は、高知平野の中心部から吾川方面及び高知県西部に向かう上で交通上の要所を見下ろす場所にある（図2・図3）。

土佐には、いわゆる古墳時代前半期に属する古墳はきわめて少ない。また、確実な前方後円墳が確認されていないなど、西日本ではきわめて特異な地域である。前半期に遡る可能性のある古墳としては、幡多地域にある宿毛市高岡古墳群と宿毛市曾我山古墳、高知平野では南国市長嶽2号墳・南国市狭間古墳などが挙げられるにすぎない。したがって、土佐では横穴式石室を内包する後期・終末期古墳が主として展開している。

東西に広い高知平野において、後期古墳が数多く展開するのは南国市を中心とする東部地域である。高知平野において最も古い横穴式石室を有する古墳も南国市にあり、長嶽4号墳と呼ばれる。竪穴系横口式石室であるが、九州等で見られるようなものではなく特異な形態を有する。出土した須恵器もTK10型式併行期に相当することから長嶽4号墳の竪穴系横口式石室は当地域における横穴系埋葬施設の初現であると考えられる。これに続くと目されるのが南国市蒲原山東1号墳や高知市高間原1号墳などである。蒲原山東1号墳は長嶽古墳群にも位置的に近く、長嶽古墳群の系譜をひくものと考えられる。蒲原山東1号墳と高間原古墳群は、石室が小

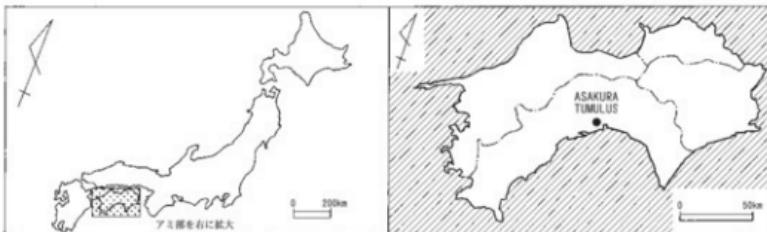


図1 朝倉古墳の位置

2 周辺の遺跡

型であること、また、前者は羨道床面が玄室より一段高いという形態的な特徴などから、他の高知の横穴式石室とは別の系譜上にあると思われる。

この後、TK43型式併行期からTK209型式併行期にかけて高知平野の北東に面した丘陵上に盛んに横穴式石室墳が築造される。南国市小奈路古墳や、高知三大石室の一つである南国市小蓮古墳、高知県最大規模の古墳群である南国市舟岩古墳群などである。同時に高知市秦泉寺古墳群やいの町枝川古墳群などにこれまで古墳が築造されていなかった高知平野西半まで横穴式石室が見られるようになる。

7世紀代にも舟岩古墳群や高間原古墳群の築造は続いている。朝倉古墳は7世紀に築造された大型石室を有する古墳である。これまで見てきたように、高知平野の古墳は多くがその北東部の丘陵上に集中し、現在の区分でいうならば南国市から香美市にかけて、古墳築造の中心があつたということができる。

そのような中で朝倉古墳は中心から西に離れた地区にある点で特徴的である。石室も他の古墳に比べ、玄門立柱石が顕著に内側にせり出すなど大きな違いをみせる。このような違いを持つ古墳が、どのような背景を持ってこの地に築かれるのか、また南国市から香美市にある古墳との関係も問われるところである。

(耕家)



図2 朝倉古墳の立地

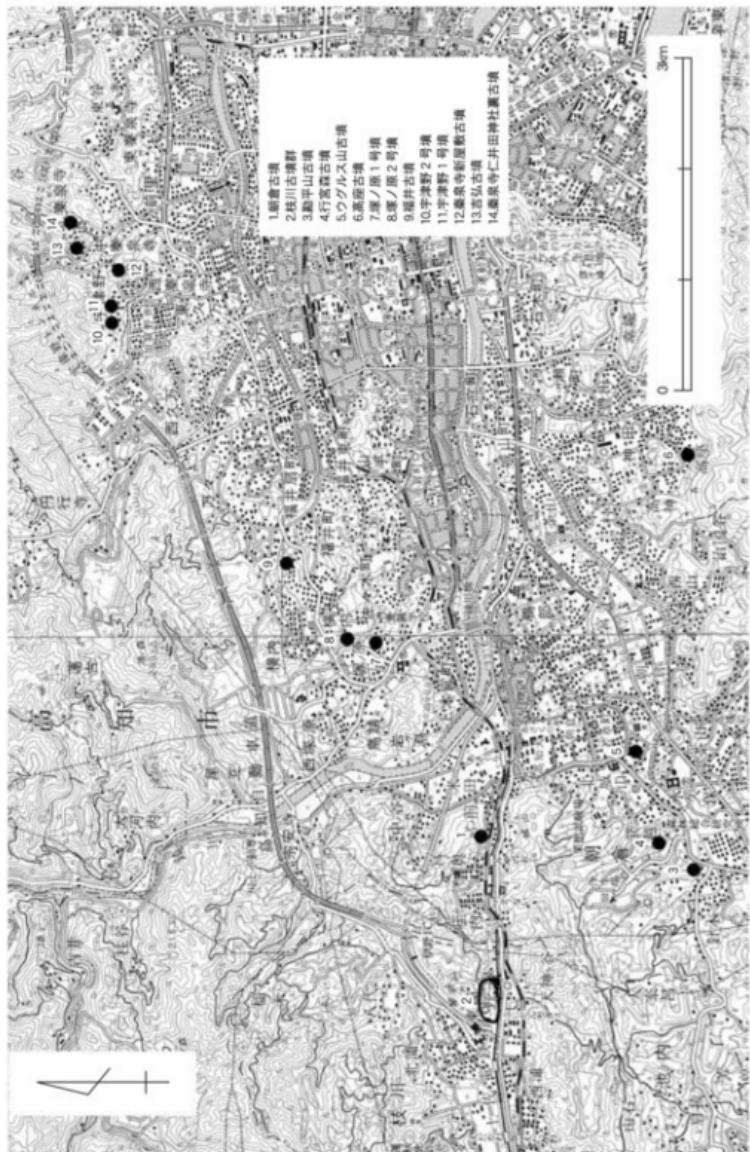


図3 周辺の主な古墳

2 調査の経緯と経過

調査の契機 高知大学考古学研究室では、2004年より一貫して高知の後期・終末期古墳をテーマに調査を行ってきた。我々が継続して行ってきた調査の中で、朝倉古墳は測量調査を最初に手がけた古墳である（高知大学2005）。朝倉古墳はその石室形態から他地域との強い関連が考えられるだけでなく、古墳時代後期から終末期における土佐の首長勢力の動態を考える上で欠くことのできない古墳であることが、研究が進展する中で明らかとなってきた。

そこで高知大学考古学研究室は、2008年度に朝倉古墳の発掘調査を開始した。後述するが、2008年度は主として石室玄室部分の調査を行ったが、羨道部・前庭部の調査を残したままであり、墳丘規模や墳形についても解明できずにいた。朝倉古墳の墳形と規模、石室の全容解明は朝倉古墳の政治的位置付けを行うには重要な項目であった。そこで、清家は財団法人三菱財團の学術研究助成「欽明朝から推古朝における四国地域政治拠点形成の研究ーとくに南四国についてー」の交付を受け、2009年度の調査を実施することにした。
（清家）

2008年度調査の成果概要 朝倉古墳は住宅開発のため、石室周囲を擁壁で囲まれた状態にある。そのため墳丘調査を行う場所は限られていた。墳丘の情報を得られる唯一の場所は石室北東部だけであった。そこで、2008年度は墳丘第1トレンチを石室北東部に設置した。残念ながら墳丘の破壊の程度はすさまじく、墳丘第1トレンチにおいて墳丘規模と墳形を想定できる材料を得ることはできなかった。墳丘第1トレンチでは、最も深いところで現地表下約1mまで造成土が堆積しており、その直下から地山が検出された。

また石室部分は玄室を中心に調査を行い、玄室奥壁沿い、あるいは右側壁沿いに石室床面の敷石を検出することができた。ただ、床面の8割以上は盜掘あるいは乱掘の手が及び、玄室床面中央部は敷石が残っていなかった。玄室北西部で検出された敷石は2段に重なっており、1段目と2段目の石の間に土師器が挟まっていたことから、追葬時に床面の敷石を置き直した可能性が高いことも確認された。盜掘坑の一部を掘削した結果、敷石は地山の上ではなく、地山の上に何層か盛土を積んで敷石を置く面を形成していることが明らかとなっている。2008年



図4 石室前庭部掘削前状況



図5 遺物出土状況

度は調査期間が限られていたため、羨道と前庭部分は2009年度以降におこなうこととし、その時の参考にするため玄室部分の土層観察用畦は基本的に残したまま土嚢をもって埋め戻したのであった（高知大学2009）。

(清家)

2009年度の調査経過 発掘調査 2年目の2009年度は、前年度に調査を行うことができなかつた石室羨道部・前庭部を中心に調査を実施した。玄室部分も再掘削し、盃掘抗の深さ等を確認するため土層観察用の畦沿いに十字形のサブトレンチを設け、調査した。また墳丘の情報を少しでも得るために石室天井石北側に墳丘第2トレンチを設定している。

2009年8月17日から調査を開始した。玄室とおなじく羨道部も擾乱が甚だしかつたが、床面を検出することができた。このことにより玄門部分の様相を明らかにすることができた。前庭部も擾乱が激しかつたものの、羨道長を確定するという目的は達せられた。

この年も酷暑のため調査員の消耗は激しかつたが、学生は弛むことなく作業を続けた。墳丘第2トレンチは前年度の経験が生きて順調に調査が進行し8月20日には掘削が終り、9月7日にはほとんどの作業が終了している。羨道床面と前庭部盛土は玄室内の床面と土壤の色が異なり、床面を判定することに苦慮した。しかし、調査員のねばり強い作業によって床面を検出することができた。羨道部左側の側石がやや内側に傾いているので、土層観察用畦を除去するにはためらわれたが、最終的には玄室・羨道をふくめて畦はすべて撤去した。

9月16日には掘削が終了し、9月18日には石室の写真撮影を行った。9月20日には関係者説明会を開催したところ十数名の参加者を得た。同24日には実測作業もすべて終わり、同日から埋め戻しを開始した。墳丘第2トレンチ・石室ともに土嚢を使って埋め戻し、表面だけ土を被せている。9月25日にすべての作業を終了し、大学へ機材等を撤収している。なお、埋め戻しに関しては、石室埋土中の石を埋め戻しに用いていない。これは将来、当古墳の整備と活用のため床面を再検出する時に再掘削が行いやすいよう配慮したためである。

(清家)

謝辞 調査を遂行するにあたり、遺跡周辺の皆様・関係諸機関には多大なご協力をいただきました。ご芳名を記して心よりお礼を申し上げます。

出原恵三・松田直則・森田尚宏・安岡保・青木ハウス・朝倉神社・朝倉宮の前奥畠内町内会・



図6 発掘調査風景



図7 調査の1コマ

6 調査の経緯と経過

株式会社トヨタ部品四国共販高知支店・高知県教育委員会・高知市教育委員会（個人・団体の順。五十音順。）
(清家)

参考文献

- 高知大学考古学研究室編 2005『朝倉古墳測量調査報告書』高知大学人文学部考古学研究室、高知
高知大学考古学研究室編 2009『朝倉古墳発掘調査概要報告書』高知大学考古学研究報告第6冊 高知大学人文
学部考古学研究室、高知
安岡源一 1953「史跡朝倉古墳」『文化財調査報告書』第5集 高知県教育委員会、高知：pp.13-16

第Ⅱ章 調査成果

1 墳丘の調査成果

2008年度は石室北東部の斜面上に墳丘第1トレンチを設定したが、住宅開発が原因と思われるが、大きく削平を被っていた。そのため墳丘第1トレンチから墳形や墳丘規模に関する情報を得ることができなかつた。石室は3方を擁壁で囲まれており、墳丘を調査する余地はほとんど残されていないが、石室天井石の北側にわずかな空閑地があったので、ここに長さ5.4m・幅1mのトレンチを設定した(図8)。掘削の結果、表土直下で古墳盛土をトレンチのほぼ前面で検出した(図9)。トレンチの北端から1m余り南までは擁壁によって大きく古墳盛土が削平されており、大きな落ち込みとなつてゐる。擁壁に伴う掘削はかなり深いので、この部分は掘削を途中で止めている。このトレンチでも墳形や規模に関わる情報を得ることはできなかつた。

検出された古墳盛土は褐色の極細粒砂を基本とし砂礫を少量含む極めてしまつた土である。トレンチの南端から2.5m北までトレンチの東側にサブトレンチを設定したところ、この盛り

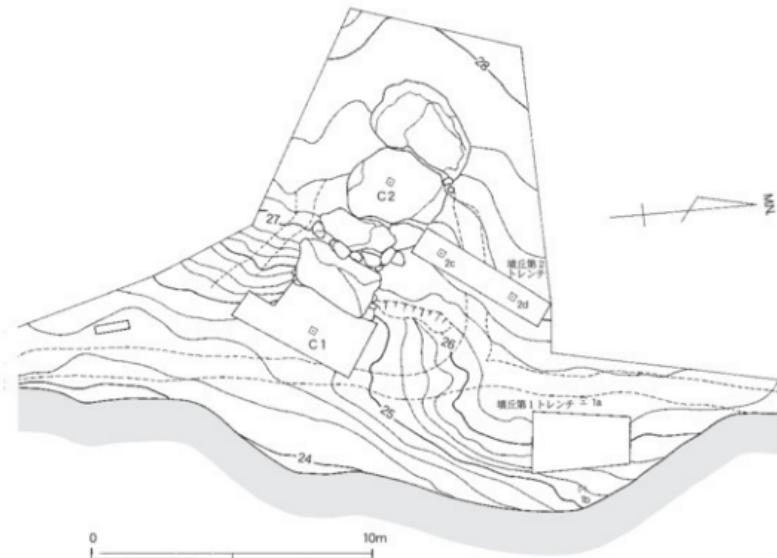


図8 調査区配置図 (アミ部は崖面)

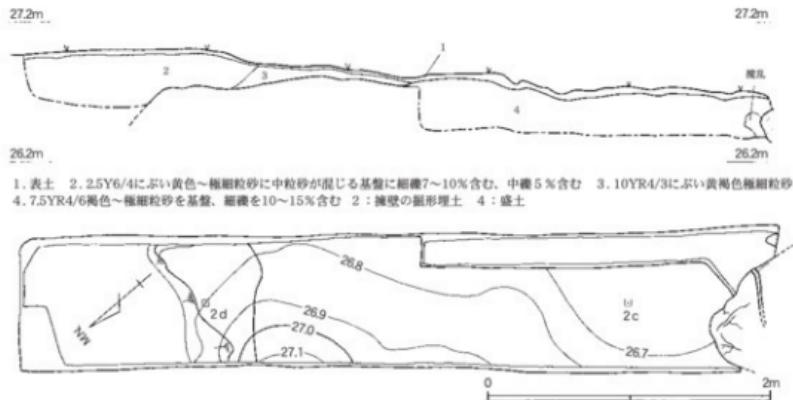


図9 墳丘第2トレーニング平面図・土層断面図

土が40cm以上の厚さで堆積していた。精査したが細かな盛土単位は見えなかつたので、少なくとも厚さ40cm以上の単位で盛土が施されていることになる。この盛土は石室側石に及んでいる。石室側石を置くための掘り方等は検出されなかつた。石室石材を積みつつ盛土を施したものと考えられる。（清家）

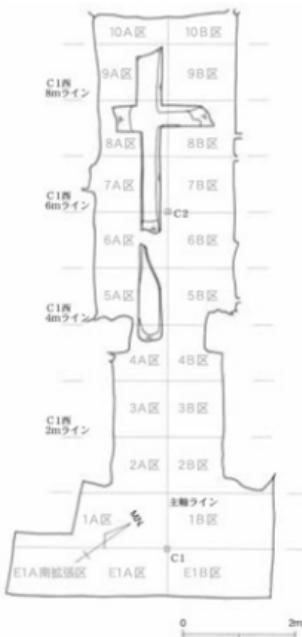


図10 石室調査区・区割り設定図

2 石室調査区の成果

(1) 調査区の設定

本年度の調査では、2008年度の調査範囲であった玄室に加え、羨道部・前部を調査範囲とした。調査区の区割りは基本的に2008年度の調査を踏襲するものであり、以下のようになる（図10）。

まず、2004年度の墳丘測量調査と2008年度の発掘調査の基準点であったC1とC2を改めて設定し、この2点を石室調査区の基準点として調査区の設定をした。C1とC2間の距離は6mである。C1より西側は、1mごとに1区から10区に分けた。今年度の調査では、C1より東に調査範囲を広げたので、C1より東側をE1区と呼ぶ。主軸ラインより南側

をA区・北側をB区とし、東西の地区名と組み合わせて地区名を呼称する。またE1A区は、後述する礎集中部の性格を確認するため、南に1m拡張した。この調査区をE1A南拡張区とする。

この結果、調査区の長さは10.4mとなり、調査区の幅は玄室・羨道についてはその幅に合わせて、それぞれ2.5m・2mとなる。前庭部の幅は1区が3.4m、E1区はE1A南拡張区を含めて4.4mとなる。
(岡本)

(2) 調査の成果

①玄室

盃掘坑の規模 玄室では2008年度の調査において、明黄褐色の盛土の上に敷石を置く床面を確認している。詳細は前回概報に譲るが、玄室中央には巨大な盃掘坑が穿たれているため、敷石は9A・10Aと7A・8A区の側石際にわずかに残るのみであった(高知大学2009)。

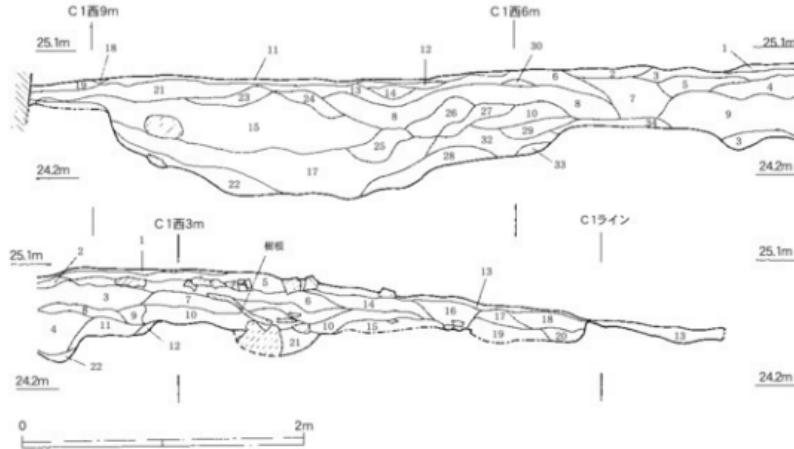
本年度はこの盃掘坑の調査を行いつつ、本年度の調査のために残していた土層観察用の畦を除去して玄室の完掘を目指した。ただ、盃掘坑は大きく深いことが昨年の調査で明らかになつておらず、盃掘坑埋土の全てを除去すると土量があまりに多くなる上、石室に悪影響を及ぼすことが懸念された。また2008年度調査時に、盃掘坑に入れたサブトレンチでは遺物量は極めて少なく、全堀しても多くの遺物は出土しないものと考えられた。以上のことから、2009年度の調査では盃掘坑は全堀せず、その一部にサブトレンチを入れて規模を確認することにした。具体的には、まず、2008年度に検出した盛土面・盃掘坑を再度検出した。そして石室中軸に設定した縦断畦南側と、C1より東に8メートルの位置にある横断畦の東側に、幅30cmのサブトレンチをそれぞれ設定して掘削をおこなった(図10)。

サブトレンチ内では、盃掘坑の底面を検出した。盃掘坑の底は最も深い7A区で標高24.08mであり、明黄褐色の盛土面から60cm程度掘り込んでいることが明らかになった(図11・図12-①)。また、5A区・6A区では、標高24.58mまで掘削した段階で2008度の調査で検出した明黄褐色の盛土を部分的に検出した。この部分は盃掘によって盛土上面を削られ、その一部が残存したものと思われる。この盛土面はB区にも広がり、2008年度検出の盛土面につながる。これによって、5区・6区における床面の検出状況は2008年度調査時とは一部異なるものになった。さらに、土層観察用の畦を除去したところ、7区・8区・9区において畦の下から新たに敷石を検出した。以上によって、床面・敷石の検出状況は図15のようになった。

なお玄室調査区からは現代～古墳時代の遺物が出土しているが、盃掘坑埋土からの出土であるため原位置を保つものはない。
(岡本)

②羨道・前庭

盛土面と敷石の検出 石室縦断畦断面図(図11)を見てもわかるように、羨道も玄室と同様に何度も人の手が入っており、現代から古墳時代までの遺物や礎が混在した土壤が堆積していた。



玄室奥壁～C1西4mライン

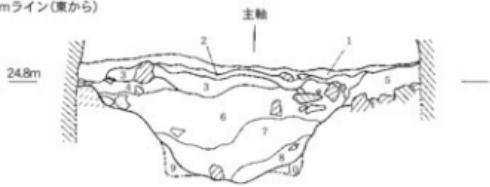
1. 7.5R3/4暗褐色シルト～細粒砂をベースに2.5Y7/2灰黄色シルト塊10%含む 2. 2.5Y5/2暗灰色細粒砂をベースに2.5Y6/8明褐色シルト塊5%含む 3. 7.5Y5/1灰褐色シルト～細粒砂をベースに10YR7/1灰白色シルト塊1%含む 4. 7.5Y7/3褐色シルト～細粒砂を2.5Y7/7淡黄色シルト塊5%含む 5. 10YR4/4褐色シルト～細粒砂をベースに2.5Y7/2暗褐色シルト塊10%含む 6. 7.5Y4/4褐色シルト～細粒砂をベースに2.5Y7/7淡黄色シルト塊10%含む 7. 7.5YR6/8褐色シルト塊10%含む 8. 7.5YR6/8褐色シルト塊10%含む 9. 10YR4/6褐色シルト～細粒砂をベースに5Y4/1灰褐色シルト塊1%含む 10. 10YR3/4暗褐色細粒砂をベースに5Y4/1灰褐色シルト塊1%含む 11. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト～細粒砂をベースに2.5Y5/4黄褐色シルト塊7%含む 12. 7.5Y4/4褐色シルト～細粒砂をベースに10YR6/1灰褐色シルト塊5%含む 7.5YR6/8褐色シルト塊5%含む 13. 7.5YR4/6褐色シルト～細粒砂をベースに10YR6/8明褐色シルト塊5%含む 10YR4/1灰褐色シルト塊10%含む 14. ピーチル片含む 15. 7.5YR6/8褐色シルト～細粒砂をベースに5Y5/6明褐色シルト塊3%含む 16. 7.5YR6/8褐色シルト塊3%含む 17. 7.5YR4/4褐色細粒砂～細粒砂をベースに10Y5/2オーリーブシルト塊5%含む 7.5YR6/8褐色シルト塊5%含む 18. 7.5YR6/8褐色シルトを5%含む 19. 10YR4/3C2にぶい黄褐色細粒砂～細粒砂をベースに5Y5/6明褐色シルト塊3%含む 20. 7.5YR4/4褐色シルト～細粒砂をベースに2.5Y6/1灰褐色シルト塊20%含む 7.5YR4/4褐色シルト～細粒砂を5%含む 21. 10YR3/3褐色細粒砂～細粒砂をベースに5Y5/7T/2灰褐色シルト塊10%含む 5Y8/3灰白シルト塊5%含む 22. 10YR4/3C2にぶい黄褐色シルト～細粒砂をベースに2.5Y7/8灰白色シルト塊2%含む 23. 10YR4/3C2にぶい黄褐色シルト～細粒砂をベースに2.5Y7/8灰白色シルト塊1%含む 24. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細粒砂をベースに2.5Y7/8灰白色シルト塊2%含む 25. 10YR4/4褐色シルト～細粒砂をベースに5Y6/6褐色シルト塊7%含むN3/褐色シルト塊1%含む 26. 10YR4/4褐色シルト～細粒砂をベースに5Y6/6褐色シルト塊2%含む 27. 10YR4/4にぶい黄褐色シルト～細粒砂をベースに5Y6/6褐色シルト塊7%含むN3/褐色シルト塊1%含む 28. 10YR4/4褐色シルト～細粒砂をベースに5Y6/6褐色シルト塊2%含む 29. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト～細粒砂をベースに5Y6/6褐色シルト塊25%含む 30. 10YR3/4褐色シルト～細粒砂をベースに5Y6/6褐色シルト塊25%含む 31. 10YR3/4暗褐色細粒砂～細粒砂をベースに5Y5/6明褐色シルト塊5%含む 32. 10YR4/4褐色シルト 33. 10YR4/4シルト～細粒砂5Y5/6明褐色シルト塊2%含む

C1西4mライン～C1東1mライン

2. 7.5Y5/1灰褐色シルト～細粒砂をベースに10YR7/1灰白色シルト塊1%含む 3. 7.5YR4/3褐色シルト～細粒砂をベースに2.5Y7/3淡黄色シルト塊5%含む 4. 10YR4/6褐色細粒砂をベースに2.5Y7/6褐色シルト塊3%含む 2.5YR3/3褐色シルト塊1%含む 5. 5YR4/6赤褐色細粒砂を5Y4/8赤褐色シルト塊5%含む 6. 8.5YR4/8赤褐色細粒砂に5Y4/8赤褐色シルト塊3%含む 7. 7.5YR3/2/2灰褐色細粒砂に5Y4/8赤褐色シルト塊5%含む 8. 7.5YR3/3褐色細粒砂に5Y4/8赤褐色シルト塊5%含む 9. 9.5YR5/6明褐色細粒砂に5Y4/8赤褐色シルト塊5%含む 10. 5YR2/1灰褐色シルトに5Y4/8赤褐色細粒砂を5%含む 11. 7.5YR5/6明褐色細粒砂に5Y4/8赤褐色シルト塊5%含む 12. 7.5YR4/3褐色シルト～細粒砂を5%含む 13. 7.5YR7/3にぶい黄褐色細粒砂、繊維を含む 14. 7.5YR4/4褐色細粒砂に5Y4/8褐色シルト塊5%含む 15. 7.5YR4/4褐色細粒砂に2.5Y5/4明褐色シルト塊3%含む 2.5Y8/3灰黄色シルト塊3%含む 16. 7.5YR5/4にぶい黄褐色細粒砂に5Y4/8赤褐色シルト塊3%含む 17. 7.5YR5/4にぶい黄褐色細粒砂に5Y4/8赤褐色シルト塊3%含む 18. 10YR4/3/4褐色細粒砂～細粒砂を10YR4/3褐色シルト塊3%含む 19. 10YR4/4褐色シルト～細粒砂を5%含む 20. 10YR4/4褐色シルト～細粒砂を5%含む 21. 10YR4/4褐色細粒砂～細粒砂を5%含む 22. 10YR4/4褐色細粒砂～細粒砂を5%含む

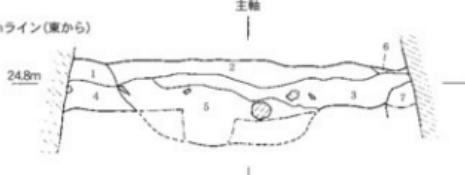
図11 石室調査区縦断土層図

① 8mライン(東から)



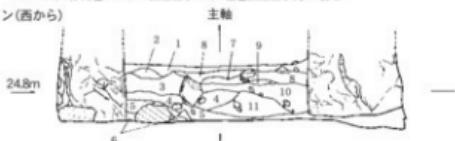
1. 10YR4/4褐色シルト～極細粒砂 2. 25YR7/2明赤灰色シルト10%含 7.5YR5/8明褐色シルト塊5%含 2. 5Y7/2灰オリーブ色シルト～極細粒2.5Y5/6灰褐色シルト20%含 3. 10YR3/4褐色シルト～極細粒砂 2.5YR6/6明赤褐色シルト10%含 4. 10YR6/6明黄色シルト～極細粒砂 5YR5/6明赤褐色シルト5%含 5. 7.5YR5/8褐色シルト～極細粒砂 5YR6/8褐色シルト塊10%含 6. 2.5Y4/4オリーブ色シルト～極細粒 7. 7.5YR3/3褐色シルト～極細粒砂 2.5YR5/8明赤褐色シルト塊25%含 8. 10YR3/4褐色シルト～極細粒砂 5YR5/8明赤褐色シルト塊20%含 9. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト～極細粒砂 10. 2.5YR4/1黄灰シルト～極細粒砂 9.10%盛土

② 6mライン(東から)



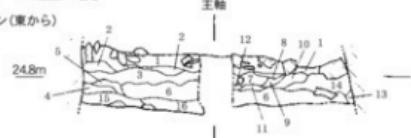
1. 7.5YR3/4暗褐色シルト～極細粒砂, 砂を含む 2. 10YR 4/4 黄褐色シルト～極細粒砂に2.5YR7/2明赤灰色シルト塊10%含, 10YR8/2灰白色シルト塊5%含む 3. 10YR3/3暗褐色極細粒砂に2.5YR7/2明赤灰色シルト塊10%含む, 10YR8/2灰白色シルト塊5%含む 4. 10YR4/6褐色シルト～極細粒砂に2.5YR7/6明黄色シルト塊5%含む 5. 7.5YR3/3暗褐色極細粒砂に5YR5/8明赤褐色シルト塊10%含, 5Y8/3淡黄色シルト塊10%含む 6. 10YR3/4暗褐色極細粒砂 7. 0YR4/6赤褐色シルト～極細粒砂に6/8褐色極細粒砂塊5%含む

③ 4mライン(西から)

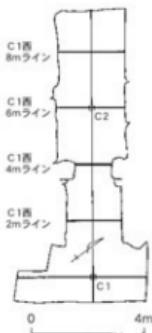


1. 10YR4/3にぶい黄褐色細胞をベースに細胞を含む 2. 5YR4/4にぶい赤褐色細胞をベースに30%白, 薄紅の極粗粒砂を含む 3. 5YR4/8褐色細胞をベースに3%の白い細胞を含む 4. 10YR3/2褐色細胞をベースに7%灰を含む 5. 10YR4/6赤褐色細粒砂をベースに中纖維を含む 6. 10YR3/4暗褐色シルトをベースに中纖維を含む 7. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂をベースに細胞を含む 8. 10YR4/6褐色細粒砂に中纖維を7%含む 9. 10YR 3/2暗褐色細粒砂をベースに灰化物粒を7%含む 10. 5YR4/8赤褐色シルトをベースに細胞を40%含む 11. 10YR3/4暗褐色シルトをベースに細胞3%含む

④ 2mライン(東から)



1. 10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂～細粒砂にぼそぼそした土, 繊維を多く含む 2. 10YR4/4褐色細粒砂～極細粒砂にぼそぼそした土, 繊維を含む 3. 10YR4/6褐色細粒砂～シルトに2.5YR6/8明赤褐色シルト5%, 10YR8/6暗褐色シルト35%含む, 固くしついた土 4. 7.5YR3/2暗褐色細粒砂～極細粒砂に2.5YR6/6, 10YR5/6, 10YR5/8含む 5. 10YR3/4褐色細粒砂～シルトに2.5YR6/6, 10YR5/6, 10YR5/8含む 6. 5YR2/1黒褐色細粒砂～シルトに10YR4/3褐色シルト～トロ 7. 10YR4/4暗褐色細粒砂～シルト含む 7. 7.5YR4/4褐色細粒砂～シルトに3%の白い細胞を含む 8. 10YR5/8褐色細粒砂～極細粒砂 9. 7.5YR3/3暗褐色細粒砂～シルトに2.5YR6/8褐色シルト10%含む 10. 10YR4/8褐色細粒砂～シルト10%含む 10. 7.5YR3/2暗褐色細粒砂～極細粒砂に10YR8/6暗褐色シルト10%含む 11. 10YR4/32にぶい黄褐色細粒砂～極細粒砂に7.5YR4/6明赤褐色, シルト5%含む 12. 10YR5/4にぶい暗褐色細粒砂～極細粒砂 13. 10YR5/6褐色細粒砂～シルトに2%含む 14. 5YR2/6暗褐色細粒砂に2.5YR5/8明赤褐色シルト塊2%, 10YR8/4浅黄色シルト塊を5%含む 15. 10YR2/2黒褐色細粒砂に2.5YR5/8明赤褐色シルト塊2%, 2.5Y7/4淡黄色シルト塊3%含む 15-16: 盛土



0 2m

図12 石室調査区横断土層図

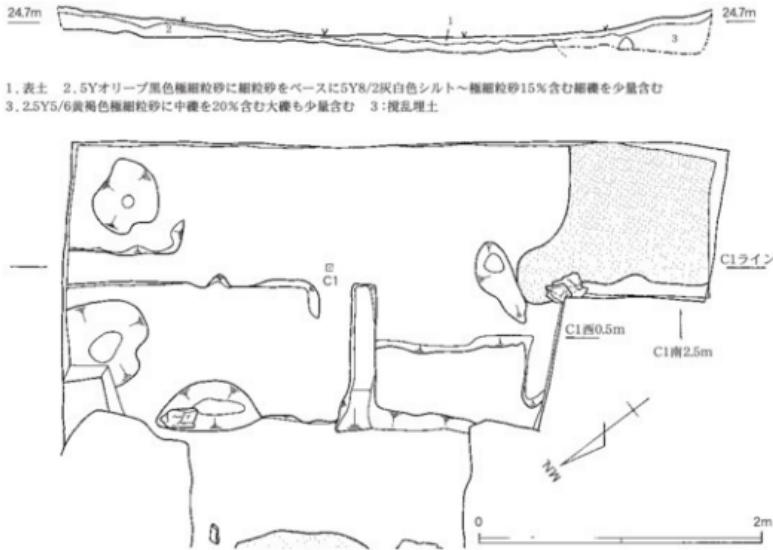


図13 前部平面図・土層図（アミ部は擾乱）

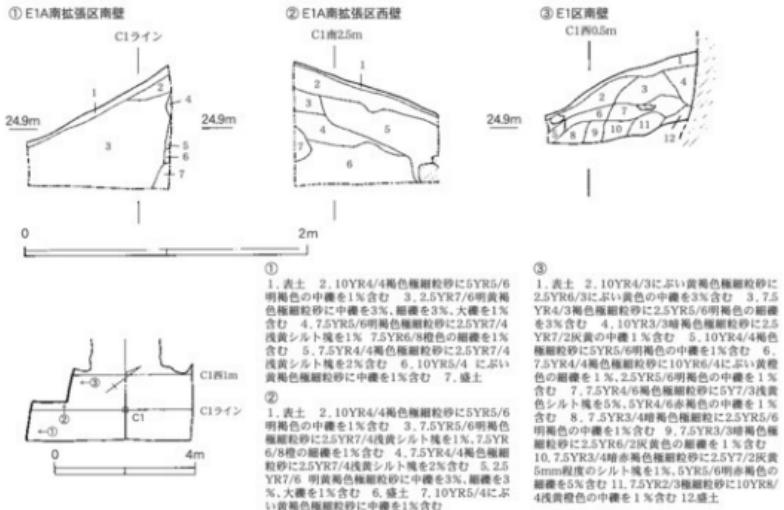


図14 1 A区・E 1 A南拡張区土層図



図15 石室調査区実測図 (東面7.1部は虚測)

4 A区では、堆積土を現地表面から45cm程度除去したところで、玄室に続く盜掘坑の掘り形と、暗褐色の盛土面（図11-12層）を検出した。盛土面の標高は24.57mである。4 B区の玄門部では現地表面から45cm程度掘削した段階で、南北に並ぶ2列の石列が検出された。玄室に近い側の石列の下には、玄室に続く明黄褐色の盛土が敷かれている。石列は石によって違いがあるが標高24.65m前後、盛土面は24.63mである。羨道側の石列とその東側では、4 A区と同じ暗褐色盛土が検出された。玄門にはステップや敷居石ではなく、玄室と同様に、盛土の上に人頭大の石が敷かれていたことがわかる^⑩。

この暗褐色盛土は、3区・2区にも続いている。3区・2区の中央や、3B区西隅には大きな盜掘坑があるが、それ以外の部分では、現地表面から45cm前後掘削した標高24.63mでこの盛土面を検出した。また、右側壁際などでは盛土上面で人頭大の石を検出した。これらの石の一部は盛土面直上に据えられているため、原位置を保っているものと思われる。敷石の標高は石によって違いはあるものの24.70m前後である。以上のことから、攪乱によってそのほとんどが失われているものの、羨道には人頭大の敷石が敷かれていたものと推定される。

1 A・1 B区では、表土を除去するとすぐに標高24.69mで、墳丘で検出した盛土（図9-4層）とよく似た堅くしまった褐色土層を検出したため、これを盛土と判断した。この盛土は羨道で検出した暗褐色の盛土とは異なるものであり、C1より西に1メートルのラインを境に盛土が変化していることがわかる。

1区で検出した盛土面を、E1 A・E1 B区に広げていくと、E1 A区南端で拳大の礫の集中部を検出した。これが古墳と関連する遺構である可能性も考えられたため、E1 A区を南に1m拡張した。その結果この礫の集中部の下に、非常にもりい明黄褐色土（図14-②5層・①3層）が入っていることが明らかになった。さらにE1 A南拡張区西壁・南壁断面においても、この明黄褐色土層が上層から切り込んでいることが確認できたため、この層を攪乱と判断し礫を除去した。E1 A南拡張区西壁際では、この黄色土の下から精良な黒褐色細粒砂を検出した（図14-①7層・②6層）。この黒褐色土は古墳の盛土と考えられる。

また従来、現在の羨道側壁の東側にも現存する側壁と同程度の大きさの石があり、羨道は現状よりも長かったといわれていた（安岡1953：p. 15）。しかし、本調査においては1区・E1区では、側壁の抜き取り穴などは検出されなかった。したがって、古墳築造当時の羨道長は現在の羨道と同じであったと考えられる。言い換えれば4区～2区までが羨道部であることが明らかになった。

以上のように、盛土面や敷石を検出した。これによって、玄門高が敷石上から計測すると1.3m・盛土上面からだと1.4mを測る。羨道高が敷石上から計測すると1.6m・盛土上面からからだと1.7mを測る。羨道幅は2.0m、羨道長が玄門部を含めて3.2mであることが明らかになった。

また、遺物の出土状況についてだが、羨道堆積土の上層では現代から古墳時代までの遺物、下層では中世から古墳時代までの遺物が混在した状態で出土している。したがって原位置を保っている遺物はない。

盛土と敷石の観察 今回、羨道・前庭部で検出した盛土は、4B区玄門部の明黄褐色土、4A・4B区東側・3区・2区の暗褐色土、1区・E1区の褐色土、E1A南拡張区の黒褐色土の4種類である。先に述べたように、10区～5区が玄室・4区～2区が羨道・1区とE1区が前庭部にあたる。このことから、玄室・羨道・前庭部の盛土と敷石については以下のように整理することができる。

玄室では明黄褐色土の盛土を床面として敷石を敷くのに対して、羨道では暗褐色土の床面に敷石を敷いている。敷石については、玄室・羨道ともに人頭大の石を使用しており、両者に違いはなかったものと考えられる。

前庭部にあたる1区・E1区においては、羨道部の暗褐色盛土とは異なる褐色盛土を使用している。この盛土は墳丘で検出した盛土と同じものであり、前庭と墳丘は同じ盛土で築造されたといえる。羨道の盛土と前庭部の盛土との層位的関係は搅乱によって確認できなかったものの、以上のことから、玄室・羨道・前庭とで盛土が異なっていたことがわかる。E1A南拡張区の黒褐色盛土については、搅乱によってE1区の褐色盛土との層位的関係が確認できていなかったため、この盛土の違いが層位によるものなのか、位置によるものなのかは不明である。

また、前庭部は位置によって多少の違いはあるものの標高24.70m前後、玄門敷石は標高24.60m前後と若干の高低差が見られる。

(岡本)

参考文献

- 高知大学考古学研究室編 2009『朝倉古墳発掘調査概要報告書』高知大学考古学研究報告第6冊 高知大学人文
学部考古学研究室、高知
安岡源一 1953「史跡朝倉古墳」『文化財調査報告書』第5集 高知県教育委員会、高知：pp.13-16

注

- (1) 4B区振削中に、左側壁に積まれた人頭大の石の一部が崩落した。そこで、それ以上の崩落を防ぐため、玄門立柱東側に土壌を残して振削した。なお、崩落した石の後ろからは土師質土器が出土しているため、この石は中世以降の時期に積み直されたものと考えられる。

第III章 出土遺物

1 出土遺物の種類

2009年度の調査では、玄室・羨道から、須恵器・土師質土器・陶磁器が出土している。今回の概報では古墳時代の遺物のみ報告し、中世以降の遺物については本報告で報告することとする。なお、遺物はすべて包含層からの出土である。

(岡本)

2 古墳時代の遺物

蓋杯 1～4は杯蓋である。1は、復元口径が11.2cm・残存高1.8cmであり、天井部から口縁部にかけて残存している。天井部は水平に近く、天井部から口縁部にむかって、なだらかに下降する。口縁部は外側に張り出し、端部は丸くおさめる。外面は摩滅しているため、調整は不明である。内面にはかえりを持つ。かえりは口縁部より下方に突出し、端部を丸くおさめる。内面はナデ調整である。焼成はやや軟質で褐色を呈す。胎土は緻密である。

2は、復元口径11.0cm・残存高1.3cmであり、残存部は口縁部のみである。口縁部はわずかに外側に張り出し、端部は丸くおさめる。内面にはかえりを持つ。かえりは口縁端部下端と同じ高さで端部を丸くおさめる。内外面ともにナデ調整である。焼成は良好で灰白色を呈す。胎土は緻密である。

3は、復元口径10.6cm・残存高1.0cmであり、残存部は口縁部のみである。口縁部は外反して端部を丸くおさめる。内面にはかえりをもつ。かえりは口縁部と同じ高さで、端部はやや尖る。内・外面ともにナデ調整である。焼成は良好で灰色を呈す。胎土は緻密である。

4は、復元口径9.0cm・残存高1.0cmであり、残存部は口縁部のみである。口縁部は外反せず、丸みをおびており、端部を丸くおさめる。内面には矮小なかえりをもつ。かえりは口縁端部よ

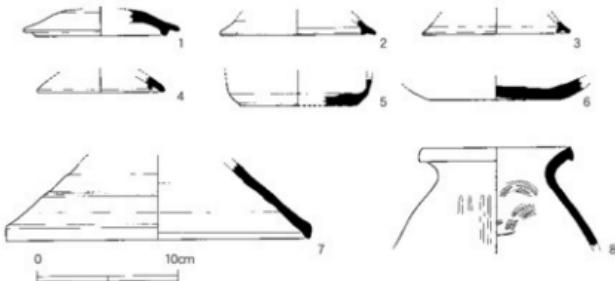


図16 古墳時代の土器

り上方で端部を丸くおさめる。外面はケズリ調整・内面はナデ調整である。焼成は良好でオリーブ灰色を呈す。胎土は緻密である。

5・6は杯身である。5は、復元底径8.4cm・残存高1.8cmであり、底部と体部の一部が残存する。底部は水平で静止ヘラ切り調整と思われる。体部は、底部から高さ1cm程度までは外傾して立ち上がり、そこから屈曲して垂直に立ち上がる。見込み部は中央部がやや窪み、その外側は水平である。内・外面ともにナデ調整を施す。焼成は良好で灰色を呈す。胎土は緻密である。

6は、復元底径9.0cm・残存高1.7cmであり、底部と体部の一部が残存する。底部は平坦で、静止ヘラ切り調整と思われる。体部は大きく外傾して立ち上がる。見込み部は水平である。内・外面ともにナデ調整を施す。焼成は良好で灰色を呈す。胎土は礫を微量含む。

脚部 7は、残存部が脚部のみであるため器種は不明だが、台付壺の脚部の可能性がある。復元径は21.6cm・残存高は5.3cmである。脚部の先端部分は面を成し、端部はまるくおさめる。脚部は内傾して直線的に立ち上がり、外面にはナデ調整を施している。内面は粘土紐の単位を残し、ナデ調整を施す。焼成は良好で灰色を呈す。胎土は緻密である。

壺 8は、壺である。復元口径は10.6cm・残存高は7.0cmであり、底部は欠損している。体部は丸みを帯び、頸部は屈曲し外反して立ち上がる。口縁部は面を成し、口縁端部は丸くおさめる。外面は平行タキを施しており、自然釉が付着している。内面は、口縁部・頸部は回転ナデ調整を施し、体部には当て具痕が残る。焼成は良好で、暗オリーブ灰色を呈す。胎土は緻密である。

出土遺物の時期 2008年度の調査においては、玄室調査区から、古墳時代の遺物として須恵器（杯蓋・短頸壺・高杯・甕）・土師器脚が出土している。須恵器杯蓋については、宝珠ツマミおよび乳頭様のツマミを持ち、蓋内面にかえりを有する、いわゆる杯Gがみられた一方で、杯Hは出土していない。このことから、これらの遺物の時期としては、TK217型式段階（田辺1966）であると考えられた（高知大学2009）。

本年度の調査で出土した須恵器杯蓋は、すべて天井部が欠損しているがツマミを有していたものと予想されるため、杯Gと考えられる。本年度も蓋杯は杯Gのみが出土しており、杯Hは見られないことから、これらの須恵器はTK217段階のものであると考えられる。前回報告でも述べたことであるが（高知大学2009）、TK217型式段階には時間幅があるため、昨年度出土遺物と合わせて今後さらに詳細に検討していきたい。

（岡本）

参考文献

高知大学考古学研究室編 2009『朝倉古墳発掘調査概要報告書』高知大学考古学研究報告第6冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』I 平安学園創立90周年記念研究論集第10号 平安学園教育研究会、京都

第IV章　まとめ

2004年の測量・石室実測調査、2008年度の発掘調査に引き続き発掘調査を行った。今年度は、墳丘に1ヵ所のトレンチを入れ、石室は羨道と前庭部を中心に調査区を設定した。玄室においても盜掘坑に十字形のサブトレンチを入れてその規模などを明らかにした。今年度の調査ではほぼ調査は完了した。出土資料の整理や石室構造の細部に関してはまだ検討が行き届いていない点もあるが、今年度の調査について現時点で判明している内容をまとめておくことにしたい。

墳丘 本年度は石室の北側に墳丘第2トレンチを設けた。ここでは表土直下から墳丘盛土が検出された。石室の掘り方は検出されなかったので、少なくとも石室上部は盛土を置きながら石材を積んでいった可能性が高い。このトレンチの北側は、住宅の擁壁工事で大きく削平を被っている。昨年の墳丘第1トレンチでも墳丘が削平されており、墳丘規模と墳形を推測する情報を得ることはできなかった。石室の3方は住宅擁壁で囲まれた状態であり、これ以上墳丘を調査できる場所がない。残念ながら、朝倉古墳の墳丘規模と墳形は明らかにできなかった。

石室 今年度の調査で石室の全容はおおよそ明らかになった。石室羨道は、現状よりも長く伸びる可能性が指摘されていたが、石の抜き取り痕などは検出されなかったので、現状の規模が築造当時の石室規模であった可能性が高い。羨道部床面あるいは前庭部も盜掘と削平で床面が荒らされていたが、羨道部は玄室と同じく敷石で覆われていた可能性が高い。玄門部床面も人頭大の敷石が置かれていた。土佐では1枚あるいは数石で構成される敷居石が設置される例が多く、とくに大型石室は1枚の敷石が設けられることが多いので、この点は朝倉古墳の特徴といえるであろう。

出土遺物 古墳時代に属する遺物は須恵器だけであった。TK217型式に属する。これ以外には古代から近世にいたるまでの土器が出土している。朝倉古墳が築造後どのような経緯をたどったかを考える上で興味深い。

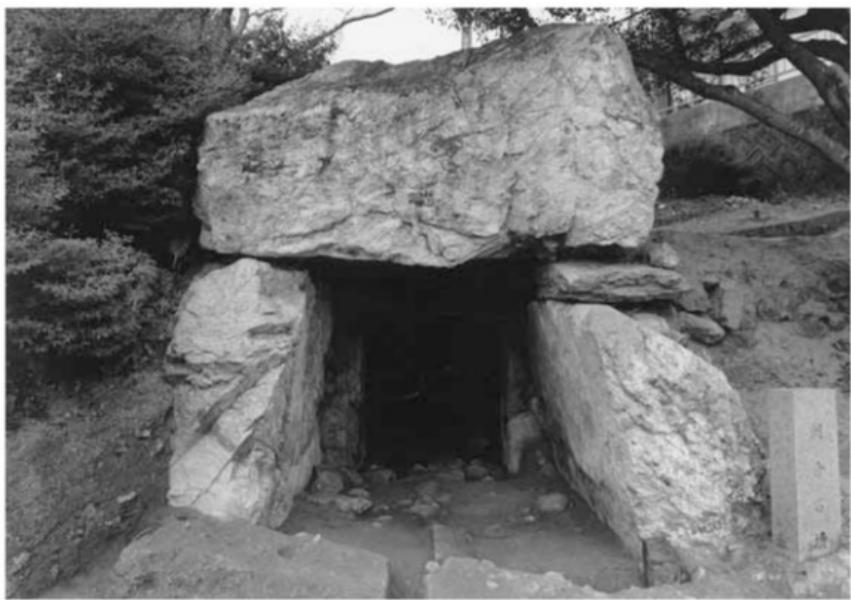
今後の課題 発掘調査は今回の調査で終了である。今後はさらに整理を進め、朝倉古墳の歴史的意義について検討を深めたい。また、朝倉古墳は高知県指定文化財であるので、県民をはじめとして広くその意義を周知し、学校教育や社会教育に寄与することも調査を担当した責任と心得ている。そのために一日も早く正報告書をとりまとめていきたいと考えている。

(清家)

図 版



(1) 古墳の立地



(2) 石室正面



(1) 墓丘第2レンチ (北から)



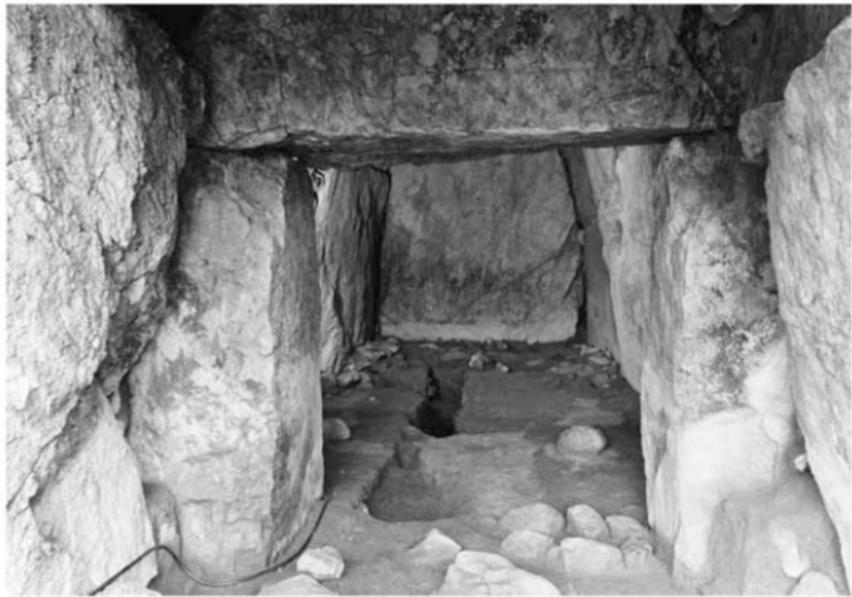
(2) 墓丘第2レンチ (南から)



(1) 前庭部・羨道全景写真



(2) 前庭部（羨門）



(1) 玄門（義道から）



(2) 玄門（玄室から）



(1) 玄室全景



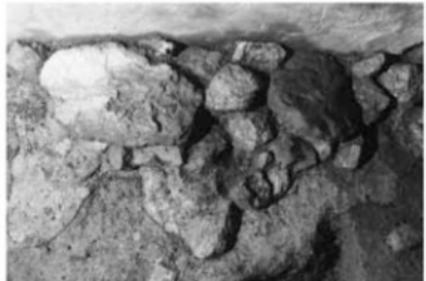
(2) 玄室全景(新ら割り後)



(1) 玄室奥壁



(2) 敷石検出状況 (玄室9A・10A区)



(1) 敷石検出状況（玄室8B区）



(2) 敷石検出状況（玄門部）



(3) 玄室右側壁（羨道から）



(4) 玄室左側壁（羨道から）



(5) 玄室右側壁（奥壁から）



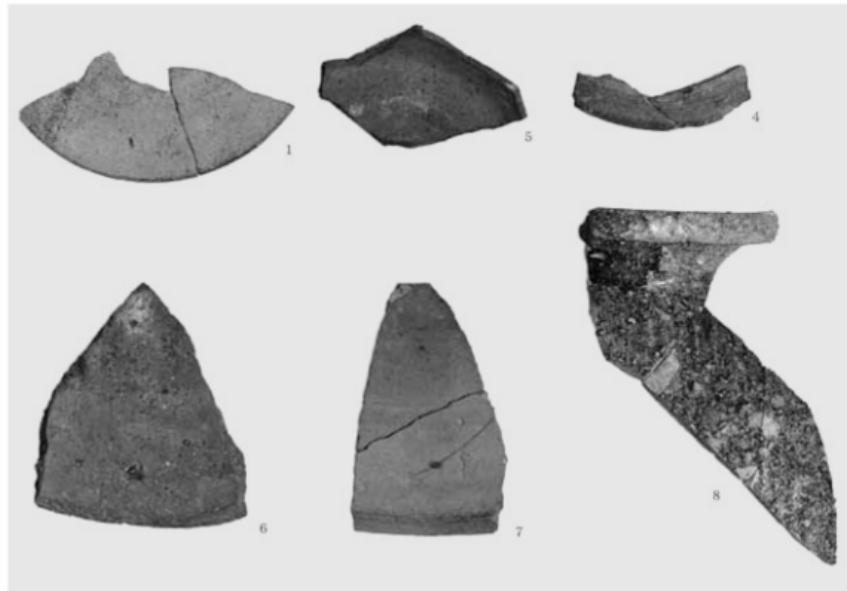
(6) 玄室左側壁（奥壁から）



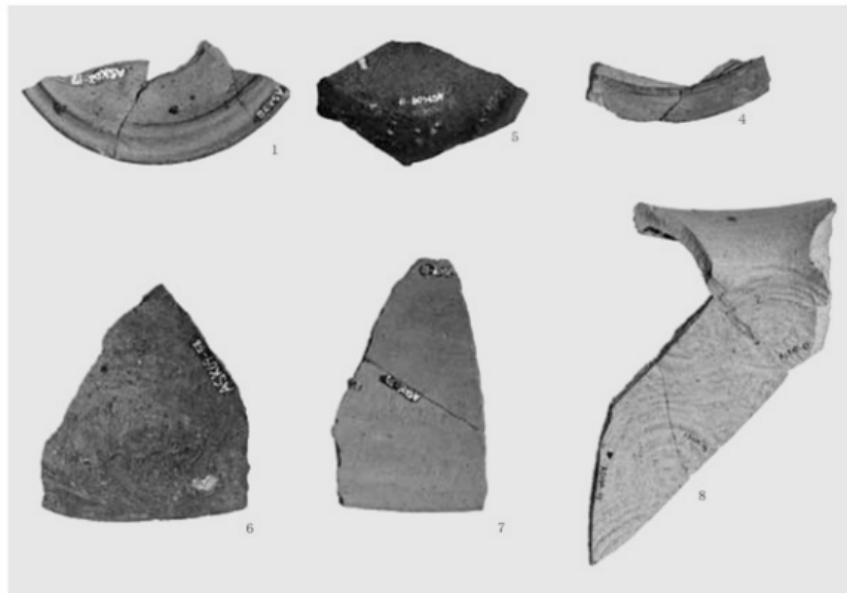
(7) 羨道右側壁



(8) 羨道左側壁



(1) 古墳時代の土器 (番号は図16と対応)



(2) 古墳時代の土器 (裏面) (番号は図16と対応)

【報告書抄録】

ふりがな	あさくらこふんはっくつちょうさがいようほうこくしょⅡ			
書名	朝倉古墳発掘調査概要報告書Ⅱ			
副書名				
シリーズ名	高知大学考古学調査研究報告			
シリーズ番号	第8冊			
編著者名	高知大学人文学部考古学研究室(編者:岡本治代)			
発行機関	高知大学人文学部考古学研究室			
所在地	高知市曙町2-5-1			
所収遺跡名	所在地			コード
朝倉古墳	高知市朝倉字宮の奥			市町村 遺跡番号 201
北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
33°33'03"	133°28'40"	090817~090925	31m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
朝倉古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室	須恵器・瓦器・陶磁器

朝倉古墳発掘調査概要報告書Ⅱ

—高知大学考古学調査研究報告第8冊—

2010年3月発行

編集 高知大学人文学部考古学研究室
 発行 〒780-8520 高知市曙町2-5-1
 印刷 有限会社 西村謹写堂
